

## 「2022年インドネシア大学スプリングスクールプログラム参加報告書」

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 大森美紀

本プログラムはインドネシア大学の UI 外国人向けインドネシア語プログラム BIPA[Bahasa Indonesia bagi Penutur Asing, Universitas Indonesia]が主体となってアレンジして下さった。プログラムの内容は大きく 3 つに分かれる。語学、文化体験、インドネシア大学日本語学科学生との交流である。プログラムではほとんどがインドネシア語もしくは英語で行われた。日本語学科の教員や学生が関わるプログラムの場合のみ日本語での通訳が付く形であった。

語学の授業はアルファベットの読み方から始まり、挨拶、自己紹介、他己紹介、道順の尋ね方や答え方、数字の教え方、お金の教え方など、日常生活に必要な言葉や表現を学んだ。このプログラムが始まる前にインドネシア語の学習はしていたが、文法事項のみで、会話は全くと言っていいほどにできなかった。個人的に、実際に言語がどのように使われるのかを感覚として掴まないと語学の取得が進まないタイプのため、これまでの学習はあまり身になっていないというのが悩みだった。このプログラムを通じて、インドネシア語を母語とする人たちがどのような雰囲気ですのか分かったので、プログラム終了後はこれまで以上にインドネシア語の学習が進むようになった。語学の授業では、文法の説明や授業の進行はおおむねインドネシア語で実施された。しかし、文化紹介的な内容であったり、プログラムの進行において重要な内容は英語で情報共有がされたので、ほとんど誤解することなく履修することができた。

文化体験の授業は、インドネシアの舞踊を踊ったり、インドネシア料理を作るなどのアクティビティがあったのでより身近にインドネシアの様子を感じることができた。また、ジョグジャカルタのオンラインツアーや童話の紹介などでインドネシアの方々日々感じている地域の雰囲気などをオンラインながら感じることができるプログラムであった。文化体験の授業はインドネシア語だけでなく日本語学科の先生や学生による通訳が着いていたので、複雑な説明や紹介があっても安心して話を聞くことができた。

日本語学科の学生とのグループワークでは、各チームが好きな内容を選び、毎日2時間ほどかけて最終日のプレステーションへの準備をした。グループワークはプレステーションの準備よりも、インドネシア大学との交流が大変良かった。お互いの文化や言語について興味がある者同士であるため、ちょっとした言葉や、文化などを紹介しあい、互いの理解を深めることができた。グループのメンバーとは現在もSNSで連絡を取っており、インドネシア語を実践的に使用する機会が以前より確実に増加した。

以上が今回のプログラムの内容と成果である。

私はインドネシア研究をしているため、これまでもインドネシアでの臨地研究には意欲があった。しかし、本プログラムを通して、以前よりも具体的にインドネシアでの調査をイメージできるようになり、意欲が高まったように感じている。UI の BIPA プログラムは今回のような初歩的なものだけでなく、BIPA2 や BIPA3 といったより難易度の高いプログラムもあるそうなので、次回は現地でこのプログラムを受講し、さらにインドネシアへの理解を深めたいと思う。